

AA 研共同研究プロジェクト

『マルセル・モース研究－社会・交換・組合』平成 19 年度第 4 回研究会

日時 2008 年 2 月 15 日（金）午前 10 時より午後 5 時 30 分まで

場所 AA 研セミナー室（301 室）

内容

1. 渡辺公三（AA 研共同研究員、立命館大学）
モース「贈与論」の歴史的文脈
2. 関 一敏（AA 研共同研究員、九州大学）
フランス社会学のつくり方 — 形態学と生理学
3. 高島 淳（AA 研所員）
『供儀論』訳稿の呈示と解説
4. 泉 克典（AA 研共同研究員、立命館大学）
『エスキモー社会』論、訳稿の呈示と解説
5. 小杉麻李亜（AA 研共同研究員、立命館大学）
モース〈祈り〉論の現在的価値
6. 真島一郎（AA 研所員）
デュルケム社会主義論とモース

1. モース「贈与論」の歴史的文脈

1950 年にモースが没した後のモースの業績とりわけ「贈与論」の評価は、同じく 50 年に刊行された論集へのレヴィ＝ストロースの「序」によって方向づけられた。1996 年、『贈与の謎』でゴドリエは、 $L=S$ が贈与論を、交換（あるいはあらゆる財の循環）体系と象徴体系に還元した（その還元のエッセンスが『親族の基本構造』とされる）と批判し、所有と占有の区別（本源的所有者の所有こそ「お返し」の強制力の源泉であり、受け取り手は単に「占有」するのみ）、所有の源泉としてのものと人の「同一性」とものの「聖性」すなわち想像体系の優位、を主張した。ゴドリエは、モースが循環する財と、譲渡されえざしたがって循環しえない聖なるものの区別に細心の注意を払っていたと主張する。前者は後者のいわば派生物であり、両者の関係をゴドリエはかつて兌換制であった時代の紙幣と金準備の関係に類比して理解している節がある。

2007 年に分冊で再刊された「贈与論」に付された序論はフランス現代社会の人類学を専攻する F.ウエーバーによって書かれ、 $L=S$ への厳しい批判と、いわば「贈与の経済」の創始者としてのモースの再評価が示されている。ゴドリエの $L=S$ 批判とモース再読がニューギニアの「未開」社会の調査を参照しているのに対して、20 世紀初頭のフランス社会の人類学を専攻するウエーバーは、いわばモースの人類学の形成期の同時代を参照しつつ、「グローバル化」による市場原理の貫徹と福祉国家の崩壊という現代から、福祉国家の生成期（モースはフランスの社会保障制度の創唱者のひとりとされる、その根拠は検証されなければならない）を振り返るかたちでモースの「贈与の経済」のヴィジョンを描こうとする。その視点は 1989 年に発足した MAUSS (*Mouvement anti-utilitariste dans les sciences sociales*)グループにつながるものと思われる。

構造主義の先駆者、非構造主義者、新たな経済の幻視者、といったモース評価の振幅が、モースの民族誌読解のテキストの多義性に由来するとしたら、翻訳作業においてもそのことを常に念頭に置かねばならないだろう。(渡辺公三)

2. フランス社会学のつくり方—形態学と生理学—

第一期(1899-1914)のモースの仕事の三本柱のうち二つ目の、「分類」「季節」といった意想外の事象と社会的凝集力との緊密な関係を問うものはこの学派では「社会形態学」とよばれた。その見取図を「社会学—対象と方法」(1901)「社会学の区分とその比重」(1927)「自譜」(1930)に即してまとめる。

1) 形態と表象：デュルケム『社会学的方法の基準』(1895)以来の構想は、いっぽうに社会の空間配置や人口に代表される集団構造(社会形態学)を、他方に諸々の制度と集合表象(社会生理学)を配する。のちの英米社会学・人類学の構造機能主義との違いは、社会のねっこに表象の総体をみとめ、集合意識とその表象(すなわち深い意味での世論)によるたえざる制度の変動ダイナミズムへの着目、さらにこの表象—制度—機能から相対的に独立したモノの極としての形態—構造というとらえ方の二点である。

2) このうち表象領域には、宗教・道徳・法・経済・テクノロジー等々に分化した社会学が構想され、『社会学年報』の目次構成はこれを反映している。しかし形態領域にはこうした下位区分がなく、また年報第一期(1898～1913)のみならず第二期(1926～)にあっても形態社会学の位置は安定していない。「分類」(1903)と「季節的変移」(1906)という古典的二作品があってもなお方法的なゆれがあるのはなぜか。二つの理由を仮説的にあげる。

①形態による表象の制約は二作品に明らかだが、なお逆のベクトルがよわいこと。イスラエル人やアラブ人の移住を左右する神話表象、大都会の魅力と田舎人の流入等の短い事例(1901)をあげるにとどまる。②にもかかわらず、新しい科学としての社会学による学問の再編(1927)のかんどころはこの形態学に集中している。厳密でない学問区分としての地理学と統計学から社会学固有の領分を批判的に回収するときに、対象は人口密度やコミュニケーション媒体といったモノ的に実証可能な形態領域にかかわる。

マテリアリストとスピリチュアリスト双方を排して自己の輪郭をつくろうとする社会学の成否は、モノと霊のつなぎ方にかかっている。社会学の区分とその配置のゆれが残す課題が、じっさいの社会形態誌とその分析をとおしてどこまで克服されているかをひきつづき問いたい。(関一敏)

3. 『供儀論』訳稿の呈示と解説

高島は、「供儀論」の第二章第三章の訳稿を提示しながらモースのインド儀礼文献のサンスクリット語からの翻訳において雄牛と去勢牛の区別というようなインドの心性にとっては極めて重要な点が正しく翻訳されていないことなどに注意を喚起し、こんごととも原典にあたった上での訳注の付加などが必要となることを示した。(高島淳)

4. 『エスキモー社会』論、訳稿の呈示と解説

泉は「エスキモー社会」の第2、3章の試訳を提示しつつ今後の訳語選定、訳注の作業方針について簡単な翻訳作業の経過報告を行った。この際に取り上げた用語のうち、とりわけクランやフラトリー、トライブなど社会人類学の語彙については、報告後の質疑を通じて、モース以後の人類学の展開など、思想史的文脈を踏まえた、慎重な取り扱いを要するとの指摘を受けた。同じく指摘のあった、モースの用語系への法律用語の混入という論点とも併せて、テキストの「徴候的読解」を許すような適切な訳語・訳注の検討作業の必要性を痛感している。(泉克典)

5. モース〈祈り〉論の現在の価値

モースの学位論文「祈り」の現在の価値を正しくとらえるために、2つの補助線を引いた。第一に、〈祈りの人類学〉の可能態としてのモース祈り論である。ティーレ、サバティエらにはじまり、ウィリアム・ジェイムズやハイラーにおいて大成した宗教学的および宗教心理学的な祈り論は、現在では限界に逢着し発展がほとんど見られない。それに対し、近年人類学者を中心に〈*une anthropologie de la prière*〉と称する新たな祈り研究の方法が模索されており、モース祈り論の再評価がはじまっている。

第二に、〈宗教人類学〉の可能態としてのモース儀礼論（祈り＋供儀）である。ユダヤ教、キリスト教、イスラーム、仏教など、いずれの宗教、いかなる宗教からも離れた宗教研究は成立しない。〈ある宗教の否定〉は、その宗教の類型から出ない。キリスト教とユダヤ教は、第二次世界大戦以後「ユダヤ・キリスト教的伝統」と呼び表されたことにも表れているように、一体化され、ユダヤ的なものの回収がおこなわれた。この文脈の上で、モースに見られる〈ユダヤ的なもの〉を浮かび上がらせる必要性を指摘した。すなわち、（本人の信仰の有無や棄教の問題とは関係のない）知的伝統の形、宗教認識の様態、それらが学問的な方法論や枠組みに対してアプリオリに与える影響を考慮することである。

共同討議では、上記の点に加え（あるいは先立って）、「祈り」論文が未完に終わっている点が重要であることが確認された。モースが構想した祈りをめぐるプロジェクト自体は未完に終わっているが、論文の中にはすでにその構想が綴られており、その全体をとらえることは可能であり、かつ不可欠である。(小杉麻李亜)

6. デュルケム社会主義論とモース

真島は、自らの研究分担にあたるモース第三期（1920-25年）と、『贈与論』発表以後の第4期（1925-29年、渡辺担当）とを理論面で架橋するテキストとして、後者の作品群から、1926年発表の論文「冗談の親族関係 *Parentés à plaisanteries*」、および28年発表のデュルケム著『社会主義』論への序文（*Introduction à Emile Durkheim*）を選びだし、両テキストの全訳と重要語彙リストを研究会席上で一同に呈示した。

とりわけ同報告では、モース贈与論における基幹語彙のひとつであるとともに、フランス初期社会主義とドイツ講壇社会主義とを間接的に繋ぎうるフランス法学史上の概念《*prestation / contreprestation*》の和訳をめぐり、モース読解上の注意がうながされた。

さらに、モース贈与論の根源的な次元における発想が彫琢されるうえで、同時代のテキスト連関として深い間柄にあったと推量されるジョルジュ・ダヴィの主著の位置づけについても、書誌上の次元で諸点、指摘がなされた。(真島一郎)